

ここをクリックすると、日本語でダウンロードできます。
(Click to download in Japanese)

行動力

探求者への頌歌

プレリユード
ウジェーヌ・フェルメール

有史以来、人間は身近な環境と密接に関わり、自然の中で得られるものを重視してきました。そして、最も適応能力の高いタイプの人間が世界を席卷し、広がっていった。ユヴァル・ノア・ハラリが『サピエンス』(ハラリ ワイエヌ, 2017)という本で述べているように、新しい考え方、認知革命が、現代人にとって自分自身をますますうまく維持できるようになったことに貢献している。これには、言語とコミュニケーションが不可欠な役割を果たしました。これは社会化と行動のシフトにつながり、人間がより目的を持って行動し、計画を立て、協力して新しい技術を開発するだけでなく、生存戦略を交換することを教えました。環境が先導し、人間の適応は主に環境の発展に従った。

産業革命以降、このような適応能力がますます求められるようになりました。現在、私たちは世界的な人口増加に伴い、食料、環境、仕事、住居などの生活環境に関する複雑な問題に直面しています。共に考え、共に働くことが、社会的・経済的に大きく異なる利害関係によって曇っているという事実によって、このアプローチはより困難になっています。特に私たち自身もたらした開発と変化のスピードの複雑さは、私たちが新たな深遠な課題に直面していることを意味しています。私たちの思考パターンや考え方を適応させることに加え、自身を刺激し、さらにスキルを開発することで、適応へと導く必要があります。私たちは、自分の思考と行動を自分の源である環境に合わせ、進化の過程にある自己を方向転換させるために、セルフコントロールをすることができるのでしょうか？建設的な調整を行い、この進化の過程で一步前進するためには何が必要なのでしょうか？他者との対話の中で、どうやってこの話を再開するのか？私たちは、生活環境を探求するという本来の動機に立ち返らなければなりませんが、思考と行動の役割を担う自分自身にも立ち返る必要があります。私たちには何が必要か？自分たちには何ができるのか？

人と違うことに対して真正性や勇気を持つ。私たちは本能的な欲求から、最初は集団やその慣れ親しんだパターンに安全を求め、全体に溶け込みたいと考えます。あえて人と違うことをしたり、自分を際立たせながらも全体の一部になるには、才能と意欲が必要です。真正性と自律的思考から、自分自身の中で批判的思考を活性化させ、グループの前提や影響から逸脱することができるかもしれません。私たちを取り巻く世界について建設的な批判的思考、抑圧的な集団の圧力や集団的な思い込みにより、自分自身を解放することが出来なくなり、再生や変化に対するオープンマインドなアプローチを阻害する可能性があります。

新しい道を探ろうとするならば、自分自身が脆弱であることを許し、失敗のリスクを取るくらいの大胆さを持ち、ビーブラウンの同名の本に書かれているような脆弱性の力を利用しなければなりません(ビーブラウン、2012年)。これは、探究心、別の視点を持つこと、相手の話に真摯に耳を傾けることの基礎となるものです。そうして初めて、人と違うこと、人と違う考え方をすることを恐れずに、自分の本音をより深く交換することができるのです。「世界を良くして、質問してください！」は、ルトガー・ブレグマンが著書『人類』(アールブレグマン 2019)で述べている教訓のひとつです。現代の視点は、回復力や達成感、利益や成長、優位性や個人的な利益に焦点を当てていることが多い。これは、他者を犠牲にして判断し、成長する文化につながります。これは、協力、真正性、自律的な思考を刺激することによる共通の利益からの成長と発展ではなく、他者と周囲を犠牲にした成長と発展です。このような社会的、政治的、経済的に刺激された態度は、個人や集団の間に病的な対人関係を引き起こし、取り返しのつかないこととなります。私たちは、多くの社会で増加している燃え尽き症候群、ストレス、不安、硬直化の数値を見てみる必要があります。人と人との間では、染み付いた、硬直した、押し付けられた思い込みに基づいて、塹壕戦が繰り広げられているのです。今こそ、環境や仲間との真摯な対話の中で、コミュニケーション、モラル、創造性、固定観念にとらわれない批判的で自律的な思考に注目し、調整、パラダイムシフトを行うべき時です。この本で、私たちは読者との対話に入り、あなたの考え方や行動力を共有し、挑戦していきたいと思っています。他者の視点に注意を払い、他者を通して自分自身に到達することを基本とした、自己の開発へのガイドです。その必要性に気づき、教育や協力の中でそれを強化することができます。この道を歩むことが、変化への第一歩なのです。この本では、さまざまな分野のさまざまなアプローチを紹介し、インスピレーションを与え、モチベーションを高め、対話につなげていきたいと考えています。

プロローグ

ベルト・ツワネベルド

2020年の夏、多くの人が思っていたように第一次コロナ・ウェーブが終わったと思われるとき、エルヴィン・センジャーズは率先して多くの人に、以下のような本への寄稿を考えてみないかと尋ねた。

- 公的な議論に向けられ、幅広い読者を対象としていること。
- 今日の最大の問題であるコミュニケーションについての洞察を提供する文書であること。
- これらの問題は、通常の方法ではなく、別の方法で解決できることを示している。

この本の読者は皆、今、「では、これらの問題は何か」と問いかけているに違いない。私たちの社会は、多くの問題に直面しています。以下は、完全なリストではありませんが、その一例です。

- 2008年から2014年にかけての金融危機や、2020年に始まったCOVID-19危機などのクライシス
- 危機の結果や気候変動など、人々が感じる不確実性
- 職場や社会での管理方法によって引き起こされる、人々の生活のコントロールの喪失
- 政府の市民に対する接し方が、両者間のギャップを拡大させていること
- 社会を市場として考えることは、しばしば政府の撤退を意味する。
- 個人主義が強まり、社会が分断されることがある。

人々のモラルの羅針盤がうまく機能しなくなっているように思えます。より高い価値観が人々の行動を方向付けることはもはやありません。この本の各章の著者は、地域、地方、国、国際的なレベルで、社会の基本的な側面を再考する必要があると確信しています。キーワードは「コミュニティ」である。コミュニティの中では、他人の幸せに貢献し、それによって自分の幸せにも貢献できる。つまり、排除ではなく、意見の交換です。

私たちの社会は、人と環境の両方から成り立っています。人々の生活の背景は、社会の本質的な部分である。そのため、変化の過程では、環境の物質的側面との関係も重要な位置を占めるはずで

す。意識の変化に加えて、それを実現するためにはどのような知識や技術が必要なのかを再考する必要があります。

本書のすべての章で、著者はそれぞれの専門分野の問題を分析し、その分析結果を議論し、具体的な解決策の方向性を示しています。分析は、哲学、経済、道徳、(自己)組織化、イノベーション、心理学、教育など、特に大学(応用科学)レベルの幅広い分野から行われています。

ここでは、10章の内容を要約してご紹介します。

冒頭の章は、アーウィン・センジャーズによるガブリエル・ファンデンブリックのインタビューである。基本的にその山の頂上は空に向かって伸びています。といった質問に対するファンデンブリックの見解が示されています。なぜ演技をするのは難しいのか？演技における言語の役割とは何か？演技をする上で、いつ、どこで、他の人が必要になるのか？どうすれば行動する際の惰性を克服できるか？集団行動のほかに、集団的無力感があるとしたら？提示されたアイデアはどれだけ現実的か？教育の役割は何か？ファンデンブリックとセンジャーズは、行動に直結した視点を提供したいと考えています。彼らは、人々のコミュニケーションを制限することにつながるかもしれないモバイル技術の膨大な使用に特に注意を払っています。

第2章「パラダイムシフトの時」では、**リーン パープ**が、多くの国が依存してきた「新自由主義」と呼ばれる経済パラダイムは、もはや通用しないと分析しています。このパラダイムは繁栄と成長をもたらしましたが、同時に有害な影響も及ぼしています。気候変動、生物多様性の減少、そして人々のグループ間の不平等の拡大という社会的な影響を考えてみてください。だから、パラダイムはシフトしなければならないのです。彼は、私たちがどのような選択をしなければならないかを示しています。

第3章「教育のための生態系」では、アーウィン・センジャーズが、コラボレーションや集団的成功を重要視したい場合に、教育システムがどのように変化するか、あるいは変化するべきかを説明しています。著者の訴えは、そのような変化を、あらゆる側面において自然から学べることと結びつけることです。自然は人類よりもはるかに長い間存在しています。もはや教育機関ではなく、教育システムに焦点が当てられているという。教育システムのキーワードは、「自己組織化」、「共創」、「コラボレーション」、「非線形学習」、「分散型リーダーシップ」です。

ガブリエル・ヴァン・デ・ブリックとアーウィン・センジャーズは、第4章「私たちを結びつけるものを求めて、固定された道徳を想像する」で、人間の存在は、道徳、権力、市場という3つの柱の相互作用によって決定されると述べています。彼らの見解では、この3つの柱のうち、最初の柱は最も弱く発達したものです。彼らは一種の議論の中で、道徳を改善する方法を模索しています。彼らの結論の1つは、ヒエラルキーを機能的な秩序に置き換えることで、意思決定は地方や地域の規模で行われるようになるということです。そして、政府は形式的な手続きを押し付けるだけでなく、利害の対立や道徳的な配慮が必要な場合には、市民が自ら解決策を見出すことを奨励すべきであるとしています。

ジャクリーン・バン・ムイエルワイジッコイジエンとピーター・バン・ダー・シジドは、第5章「橋の建設、信憑性の役割」で、多くの学生が大学卒業後にアカデミックな仕事に就くのではなく、ビジネス関連の仕事に就くという観察から考察を始めています。彼らは知識を得るために教育を受けているのであって、ビジネスの中核であるお金を稼ぐためではないのです。彼らの目的は、教育的観点からアカデミアとビジネスの橋渡しをすることです。彼らの主な提案は、大学の教師がビジネスの世界に精通することを目的とした質問をすることで、ビジネスの世界をより深く知るべきだということです。

サブリーナ・スコックによる第6章「サーキュラーイノベーター教育、なぜ世界はサーキュラーエコノミーの思想家と実行者を教育する必要があるのか」は、公立高等教育におけるサーキュラー・エコノミー・イノベーターのための国境を越えたプログラムを作成するためのサーキュラー・イノベーションについて書かれています。このプログラムは、107の科学的な査読付き論文のレビューと、候補となった40の出版物の分析、およびサーキュラー・エコノミーの研究プロジェクトのオンライン検索に基づいています。8つの興味深い研究イニシアチブと8つの出版物が、サーキュラーイノベーション教育についての洞察を与えています。得られたコアな知識は、科学者、トレーナー、人材管理者、そしてサーキュラー・イノベーションの分野で教育を続けようとする人たちに関連しています。循環型経済は未来であり、循環型イノベーションは教育によって実行されるべきです。これは、これらを実行できる人、トレーニングを受ける人、そして(商業的な)実装で役割を果たすことができる人を見つけることを意味します。

ジャーupp・ブーンストラは、第7章「遊ぼう」の冒頭でこう述べています。組織に属する多くの人々は、自分たちの環境をダイナミックなものとして経験しており、未来がどうなるかは不確かである」。このような不確かな状況では、計画されたプロセスによって未来を準備することはほとんど不可能である。ブーンストラの考えは、自己組織化であり、そこでは「遊び」が重要な役割を果たします。未来を形作るために、プレイヤーは自己組織化された集団を形成するべきであり、それ自体は事前に定義された目標による明確な結果を目指すものではありません。自己組織化以外のキーワードとしては、変化、コミュニケーション、意思決定、紛争解決、(相互)信頼、学習、オーナーシップ、そして楽しみがあります。

ヤン・ブランセンの第8章「私一人ではできない」では、こう問いかけています。ホモ・サピエンスの標本としてのアイデンティティを維持することは何を意味するのか。そして、人類として生きていくためには何が 필요한のか、人新世において環境を破壊しているように見える種として、また、自らの名前に帰した知恵を主張する権利があるように見えない種として。これらの疑問を議論するために、私は次の5つの基本概念をうまく利用するつもりです:オートポイ

エーシス(オートポイエーシス)、適応性(適応性)、コミットメント(コミットメント)、活動性(アクティビティ)、時間性(テンポラリティ)』。

ウジェーヌ・フェルメールの第9章「生きる姿勢としての自律性、オートノイアの発展」では、真実か偽物か、その中間のものまで、あらゆる情報が津波のように押し寄せる中で、自律的に考えることの重要性に焦点を当てています。誰もが私たちの住む複雑な世界の中で、時には一人で、時には他人との関係の中で自分の道を見つけなければなりません。この複雑な状況の中で、誰もが自分自身を構築する義務があります。教育と思考の発達が中心的なテーマとなっています。フェルメールは「オートノイア」という言葉を使っていますが、これはギリシャ語の「自己(オート)」と「思考(ノイア)」を組み合わせたもので、自律的に考えるための基礎的なスキルや態度の開発を意味しています。

締めくくりの「運転席」では、アーウィン・センジャーズが「すべての人に生活必需品を提供し、変化する状況に適応するための技術、知識、技能はあるが、現代の大きな課題を解決するための行動力は現在のところ十分ではない」と広範囲に論じています。もちろん、可能な解決策についても多くの示唆を与えてくれます。